

## 農林水産大臣賞(作文3部)

### 「黄金の秋」

朝日村立朝日中学校二年 遠藤 晃毅

「はあ。つつかんだー。」

僕は部活から帰ると、こう言って、すぐにアイスを食べねところがる。いつもならそうんだけど今日からは最悪の日が続く。

ほら、来た来た。

「晃毅。今日がらまだ手伝つてくれちゃー」

「えー!」

僕は、「部活から帰ったすぐ後なのに、やっぱり……。」  
と思った。去年のことだ。

僕は嫌々ながら父についていった。

「今日はや、このぶぐるどどトラックさつんでや、キャリアどご田んぼさ持ってってや、あ、それど長くつ忘んなよー……。」

といろいろな働かせられる。

「はあやんだぜーオレ。」何でオレだけ?

この時はまだ弟は小学六年生で、父は力仕事はむりだろうと思っていたのかもしれない。そうなのかどうかはわからないが、父は僕にしょっちゅう仕事をたのんでくる。

「これだから稲かりの季節はいやなんだ。」

米づくりは、肥料作りから始まる。春のうちに田んぼに牛のふんなどをまいておき、どっしりとして、土のよい田んぼを作る。父や祖父は、田んぼに入ったりにおいをかいただけで、その田んぼの土がいいか、悪いかかわかるという。僕は仕事はいやだけど、これだけは、職人技だと思って尊敬している。

次は苗を育てる土作りだ。この土は特別で、肥料やなんかが最初からまざっている。その土も何種類かあって、それを、バランスよくまぜ、苗ばこに入れる。

苗ばこに専用の機械で種を入れ、水をかけていく。この種は、約一カ月前から水につけておくのだ。そうするといひ芽がでるらしい。

そして、ハウスで育てた苗を、今度は、田植えだ。

僕は、よくあんなに楽しそうにできるなあをつくづく思う。

なんと、父や祖父たちはこの仕事をしながらも笑っているのだ。

「田んぼの仕事ってこんなに楽しいことか？」

父と祖父に聞いてみた。二人とも、

「やりがいがあるでのー。晁毅だちのおいしそくに食べるどー見れるしー。長くやっでっど、おもしろくなっでくるー。」

おもしろい。二人は田んぼ仕事の事を、おもしろいと言った。

僕は小さいころ父のボロボロになった、手の平を見た時がある。(こんなに傷だらけだったのに楽しい?)

今の父の手をそれ以上だ。僕と同じ仕事をしているのに、手の汚れや傷がちがう。僕は急にはずかしくなった。

父や祖父は一生懸命に仕事をしているのにその横で、だらだらと仕事をする僕。

自分が情けなくなった。(どうしてオレはこうなんだ。なで一生懸命にできないんだ。)

くやしい。

僕はその日一日中そんな思いが胸の中にあつた。だから、そんな思いがあつたから、がむしゃらに働いた。

「今日はありがだよ。本当で助がった。」

いつもは、何も感じない言葉だけこの日は、すごくうれしく感じた。つらい思いなんてどっかに吹っこんでた。

もう一つ、うれしいことがあつた。いつも仕事がおわつて見る田んぼは、ただ光ってるように見えるだけだったけど、「この日の田んぼは、黄金に輝いて見えた。」

「一生懸命やった後にはこんなにいいことがある。」

もうすぐみんなにとっては実りの秋がやって来る。だけど僕にとっては黄金の秋だ。今年の稲は去年以上に黄金に輝いている。僕だけががんばったから、それに応えるように稲が輝いてくれる。僕はにそう思えた。

黄金の秋の、黄金の稲。

「今年の米は、絶対うめえぞー！」

